

第3章実践例（案）

実践例1 まず、担当する児童生徒について知りたい！どこから情報を集めればいいのか？児童生徒のどんなところを見ればいいのか？

1. 対応する際のポイント

(1) どこから情報を得る

- ①資料から情報を得る。
- ②聞き取りから情報を得る。

(2) 児童生徒の見方

- ①好きなこと、得意なことはどんなことか。
- ②何に困っているか。
- ③体の使い方はどうか。

2. 実践例の概要

実践例の対象：通常学級の担任経験があり初めて通級指導の担当になった小学校教師

実践例の概要（想定）：

- ・前通級担当者は転勤しました。
- ・担当する通級指導教室には特に体の動かし方にぎこちなさを持っている児童が多く在籍しています。
- ・校内で相談できる教師も少なく、体の動かし方の指導の助言を受けたいことで、特別支援学校のセンター的機能を活用することにしました。

3. 具体的な取り組み *P5 第2章(2)子供のことを知ろう。

(1) どこから情報を得る。

①資料から情報を得る。

前年度の通級担当者から引き継ぎ資料や個別の教育支援計画、個別の指導計画から情報を得ましょう。新規で通級に在籍する子供の場合は、通知表の写しなどを活用しましょう。

②聞き取りから情報を得る。

前年度の通級担当者からはどんな授業をしていたかを聞き取るようにしましょう。子供たちの授業はすぐに始まりますので、まずは1時間の授業の引き出しを増やすようにしましょう。在籍学級の担任からは、学校でのエピソードを聞くと子供の姿が浮かんできます。課題となったエピソードだけでなく、良い取り組みのエピソードも聞き取りましょう。

(2) 児童生徒の見方

①好きなこと、得意なことはどんなことか。

子供の好きなこと、得意なことを知ることで、通級指導の時間に生かすことができます。通級に来たものの不機嫌な時ややる気が起きない時もあります。フリートークなどを設定して好きな話題をするだけでも子供は関心を持ってくれます。

②何に困っている

通級指導の対象は子供です。子供が何に困っているか？を観察することが大切です。一方、

対象の子供は困りを感じていなくても周りの子供や教師が困っていることもあります。周りの環境や関わり方も含めて何に困っているか観察しましょう。

③体の使い方

周りの子供にすぐに手が出たり、授業中机にふせて座っていたり、衝動的な場面や怠けているように見える場面があります。子供の情緒面に加え、普段の体の使い方を観察することが大切です。

（3）実践例における取り組み

*センター的機能を活用して、体育の時間の「短なわとび」の助言を受けました。

体の動きがぎこちない児童への指導について、特別支援学校のセンター的機能を活用し助言をもらうことにしました。

*第1章（4）困ったら、一人で悩まずに相談しよう（特別支援学校のセンター的機能）

①授業場面：やる気はあるものの縄を降ろすときにジャンプができず、縄を飛び越えられません。連続ジャンプの動きがぎこちなく、どすんどすと飛んでいます。

②助言内容：

- そもそもジャンプと一緒に手を下げる動きができないのではないかと？まずは、縄を持たずにジャンプをする時に腕を上から下げる動作をやりましょう。
- 連続ジャンプの動きがぎこちなく、どすんどすと飛んでいました。足首、膝、股関節を柔らかく使うと連続ジャンプがしやすくなります。

③助言を受けた後の通級の授業：

- なわとびをする前に、立位で足首、膝、股関節を同時に少し曲げ、関節を柔らかく使うことを取り入れました。
- 教師も動作のポイントがわかったことで、実際の動作を絵カードにして児童に見せて説明しました。

第3章実践例（案）

実践例2 本人・保護者面談について、準備はどう進めればいいのか？面談時には、何に気を付ければいいのか？

1. 対応する際のポイント

【保護者に対して】

① 不安や辛さに配慮する

通級による指導を受けることを決めるまでに、保護者は様々な出来事を経験しています。それは肯定的な体験ばかりではありません。時には、配偶者にさえ、理解されなくて孤立していることもあります。通級担当者として出会ったときには、まず、そうした背景があつての面接であることを前提に丁寧に対応しましょう。

② 相手の話をまず聴く

最初の面接では、保護者が通級による指導にどのようなことを期待しているのかは聴いてみないとわかりません。知りたいことがあるのか、説明を受けたいのか、不安を払拭してほしいのか、子供について細かく説明したいのかなど、まず、どのようなことを主な目的として面談に臨んでいるのかを聴く姿勢を持つことが重要になります。

③ 基本的な枠組みを正確に伝える

指導に関する内容や、約束事、そして支援の範囲などはできるだけ丁寧に具体的に説明しましょう。最初の段階で説明が曖昧なままであったり、指導に対する過小・過大評価が起きるような伝達の仕方だとその後のコミュニケーションに支障が出る場合があります。あたたかい雰囲気を保ちながらも、指導に関する合意形成では現実的な伝達も必要です。指導に関しての決め事や伝達すべき事項が簡潔にまとまった書類などを用意して使用するなどの工夫も効果的です。

④ 意見にズレがあつた場合にもそれを前向きにとらえて対応する

②や③などの流れの中で、保護者と指導者間での指導に関する意見のズレが明確になる場合があります。しかし、最初の段階ではズレが起こることの方が普通だと考えて、慌てずに、そのズレの原因や、修正の可能性、お互いに納得できる落としどころを見つける「建設的な対話」に努めます。特に、ズレが大きいときには自分だけで解決しようとせず、関係する者（在籍学級の担任、コーディネーターなど）に相談するなり、一緒に面接に入ってもらつなど、第三者に客観的にものごとをみてもらうのも大切です。

⑤ 今後の連絡方法について確認する

最初の面接だけでは簡単に合意形成ができない内容が出てくる場合もあります。また、学年のスタートにあたり、面接後に様々な変化が起きてくることも予想されます。一回の面接で、すべてのコミュニケーションが可能になるわけではありません。これからの連絡方法について、しっかり確認していきましょう。通級担当者が対応できる範囲を明確に伝えつつ、保護者の安心が得られるような方法を具体的に設定していきましょう。

【子供に対して】

① 信頼関係を形成する

第3章実践例（案）

最初の出会いは、親しみ、安心感などこれからの関係における基礎を作ることが何よりも大切になります。教室の雰囲気、指導者の物腰、語り口調などの要素が、そうした信頼感を作る土台となります。特に、子供によっては、反抗、疑い、自信喪失などの否定的な感情を持っている場合もあります。そのような場合には、その子供の思いを包み込むような姿勢で面接に臨むように工夫してみてください。具体的には子供の好むテーマを事前に調べておいて話題にする、子供の希望をまず尋ねるなどとよいでしょう。

② どのようなことをやるのか具体的に示す

子供にとって最も気になることは「何をさせられるのか」に尽きます。指導内容をわかりやすく説明しましょう。もちろん正確に伝えることが大切ですが、あまりに厳密な説明になると、子供はかえって不安になることもあります。魅力的な部分について、教材を見せたりしながら具体的に説明してください。もちろん、子供から出てきた指導に関する質問は何より優先的に取り扱ってください。

③ できる・できないではなく、通級で楽しく学ぶことが目的であることを説明する。

子供によっては「できる・できない」ことに敏感に反応する子供が多いです。まずは楽しく通級すること、そのあとに前向きに自分の課題に取り組むことができるようになることが大切であることを、わかりやすく説明します。

2. 実践例の概要

初めて教室を訪ねてきた保護者のAさんはとても緊張していました。しかし、面接が始まると、これまでの学校生活での親子とも苦勞話から始まり、子供の学習意欲の無さや、将来に対する不安が次々に語られました。指導担当者は、Aさんの話が一息ついたところで、そこまでの話を整理し、それに対して、自分ができること、そして、将来への不安について、一つ一つ解決していくことを確認して面接を終えました。

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

Aさんは通級担当者に会ってみて、様々なことを伝えたいと思ったのでしょう。保護者が伝えたいと思ったことが伝わったという実感を持てるような対応が何より大切になります。しかし、指導者が伝えたいこともきちんと伝えることも大切です。実践例では、まず保護者からの話（上記ポイント①②）→その気持ちを受け止めつつ、こちらからの必要なことの伝達（上記ポイント③④）→面接で不十分であった部分や今後の変化への対応（上記ポイント⑤）などの作業をしています。

並行して、子供に会う場合には、保護者と同室の方がよいのか、それとも分けて会う方がよいのかの判断も必要になります。その判断のポイントは、上記ポイントの【子供に対し】が実現できそうかどうかを基準にするとよいでしょう。

第3章実践例（案）

実践例3 本人・保護者の願いをどうやって汲み取ったらいいんだろう？日々、保護者とはどんなふうに関わればいいんだろう？

1. 対応する際のポイント

- 「この先生は自分の話を聴いてくれる」と子供や保護者が感じることから信頼関係は徐々に築かれていきます。
- 行動や特性が他の多くの子どもとは異なることから、「自分の子供だけ」という保護者の孤立感に対する精神的な支えとなるように、保護者の立場になって考えてみる姿勢が大切です。
- 苦手なことや短所ばかりに注目するのではなく、長所にも注目して共通理解を図ります。
- 障害として受け止めるよりも個性の一つとして情報を整理し、これからの学習や生活の仕方について一緒に考えます。

2. 実践例の概要

小学校2年生の男児です。学習課題には積極的に取り組みますが、ちょっとした刺激に反応してしまい、取組の途中で他のことに気を取られ、課題を最後までやり遂げることができないことが多く見られます。先生や友達の話最後まで聞かずに活動してしまうため、早とちりや勘違いをして周りが期待していることと違う活動をしてしまうこともたびたびあります。なかなか自分の思うような成功経験が得られないため、うまく取り組めない場面では、すぐにあきらめてしまうような様子も見られてきています。授業中は常に何かを触っていて手遊びをしています。

友達と遊びたいという思いはとても強く、自分から関わりを求めますが、相手の気持ちや状況に関係なく一方的に関わるので、お互いの思いの行き違いからトラブルに発展しやすい様子も見られます。子供も友達とうまくかかわれないことには気付いていますが、どうして良いかわからないようです。

保護者は、家庭でも話を最後まで聞かずに失敗することが多いため、注意されたり叱られたりすることがどうしても多くなると話しています。最近、失敗に対して自分のしたことを認めようとしない、自分の思い通りにならないと妹に暴力をふるうことも出てきたということです。保護者は、話が聞けないことや友達との関係をととても心配しており、いけないことにはきちんと対応し、失敗経験の中から善悪の判断や我慢することを学んで欲しいと望んでいます。

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における対応

- 「この先生は自分の話を聴いてくれる」と子供や保護者が感じることから信頼関係は徐々に築かれていきます。

はじめから「何か助言をしなければ」とは考えずに、保護者の不安や悩みを受け止め、十分に話を聞くという姿勢が大切です。保護者は子供との関わりが毎日のことなので大変です。日常生活の具体的なエピソードを聞き取り、その対応の大変さ、つらさについて気持ちを受け止めます。

子供からも、注意されたり叱られたりすることが不本意である気持ちを汲み取り、したかったことや望んでいたことなどを聞き取ります。

この事例では、保護者は、失敗経験の中から善悪の判断や我慢することを学んで欲しいと

第3章実践例（案）

望んでいます。まずは、保護者の子供の捉えや願いを否定せず、受け止めることから信頼関係はつくられていきます。

- 行動や特性が他の多くの子供とは異なることから、「自分の子供だけ」という保護者の孤立感に対する精神的な支えとなるように、保護者の立場になって考えてみる姿勢が大切です。

この事例では、先生や友達の話を最後まで聞かずに活動してしまうこと、相手の気持ちや状況に関係なく一方的に関わることから友達とのトラブルが多いことなど、保護者の立場になって考えてみると「なぜ自分の子供だけが」という孤立感を抱くことも考えられます。現在の状況からそのように感じることはもっともであること、担当としても友達同士の関係がうまくいかなることを心配していること、しかしまだ決定的な状況にはなっていないので丁寧に見守っていく必要があることなどを伝え、一緒に悩む姿勢を示すことが保護者の孤立感に対する精神的な支えとなります。

- 苦手なことや短所ばかりではなく、長所にも注目して全体像の共通理解を図ります。

保護者との面談では、子供の苦手なことだけでなく、得意なことや好きなことも聞き取ります。行動面に問題を抱えていると、できないことに注目してしまい、得意なことや好きなことになかなか意識が向かない場合もあります。保護者が苦手だと思い込んでいて、保護者自身が意外とできていることに気づいていない場合もあります。通級担当者から長所をいくつか具体的に挙げていくことで気づきを促す場合もあります。

在籍学級の担任からも、課題には積極的に取り組むこと、友達とは自分から進んで関わろうとすること等、学校生活の中でもとても意欲的なよい面があることなどを聞いておきます。得意なことや好きなことは子供からも教えてもらいます。日常の対応においても、失敗したことだけでなく、成功したことも聞き取り、その背景や状況について一緒に考え、整理しておくことが次につながります。「なんでうまくいかないんだろう」という子供の前向きな気持ちをくみ取ることで、成長の可能性を意識化することができます。

- 障害として受け止めるよりも個性の一つとして情報を整理し、これからの学習や生活の仕方について一緒に考えます。

刺激に反応しやすく、行動面に落ち着きがないタイプの子どもに対しては、どうしても注意したり、叱ったりしたりする場面が多くなります。注意や叱責は、やめさせたい行動を止めることはできても、適切な行動に結び付けることまでは期待できません。どう対処すればよいか具体的に教えていく必要があります。授業中の手遊びは不安傾向の現れとも受け取れます。失敗経験を糧にするだけでなく、成功経験から対処の方法を学び、自信や意欲の低下を招かないようにします。うまく取り組めていない場面に注目しがちですが、うまく取り組めている場面に注目し、こまめにほめたり認めたりすることで、自己肯定感や自己効力感を高めていくことが大切です。

第3章実践例（案）

実践例4 指導目標、指導内容、指導方法は個別の指導計画にどの程度具体的に示せばいいんだろう？また、どうやって決定すればいいんだろう？

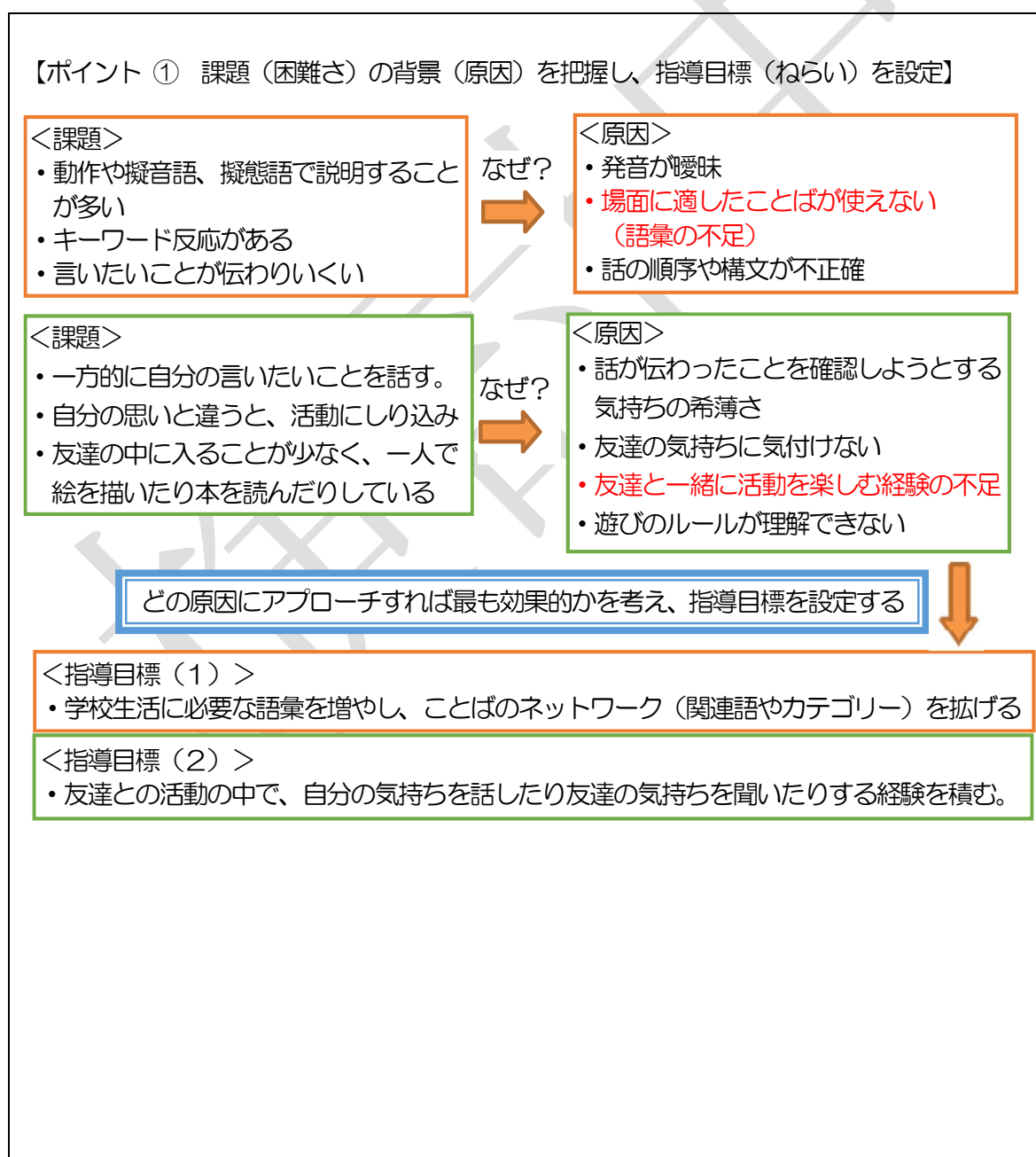
1. 対応する際のポイント

- ポイント① 課題（困難さ）の背景（原因）を把握し、指導目標（ねらい）を設定
ポイント② 課題への対応＋子供の興味関心・強み（長所）を生かした指導内容・方法

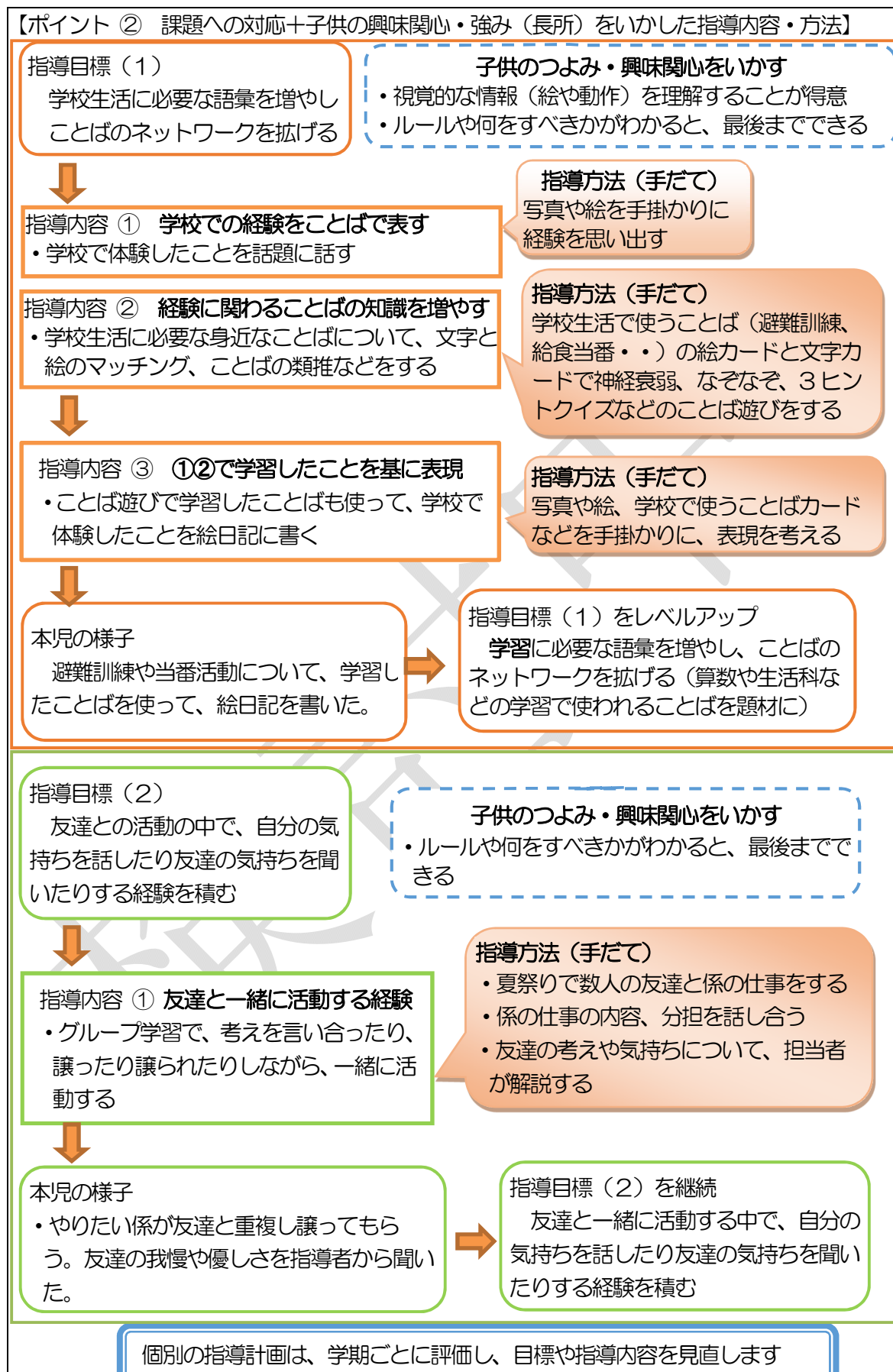
2. 実践例の概要

- ・小1 言語発達に遅れがみられる（中等度難聴 両耳に補聴器着用）
- ・子供の願いは、「友達と楽しく遊びたい」

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組



第3章実践例（案）



第3章実践例（案）

5. 参考資料

- 個別の教育支援計画の例示
 - 個別の指導計画の例示
 - 通級教室の個別の指導計画
 - 連携型個別指導計画
- など
- 指導内容、手立てに示した指導の教材例
- など
- [学習指導要領解説（自立活動編）へリンク](#)



第3章実践例（案）

実践例5 年間の指導スケジュールをどんなふうに立てればいいだろうか？

1. 対応する際のポイント

1. まず、自立活動の個別の指導計画を確認しよう
2. 在籍学級のカリキュラム、学校行事・学年行事等から活躍の場・成果発揮の場を探ろう
3. 得意なことを生かしたり、効果的に少人数指導を取り入れたりして、指導内容・方法を決定しよう
4. 評価→改善を行い、課題の改善・克服に向けて段階的な指導に取り組もう

2. 実践例の概要

年間指導計画表例を示し、以下の点について記載

- ア. 自立活動の個別の指導計画から目標と具体的な指導内容
- イ. 行事等（少人数学習、通級外での活躍の場・成果発揮の場）との関連について
- ウ. 得意なこと、好きなことを生かしたアイス・ブレーキング要素の強い活動と、目標達成にむけて設定した指導内容とのバランスについて
- エ. PDCA サイクルによる評価・改善と段階的な指導について

※ 新規通級児、継続通級児の2パターン例示

※ 通級終了に向けては通級回数を減らしていくこと等を明記する。

例【LD・ADHD通級】1学期：週1回→2学期：2週1回→3学期：月1回→終了

【LD・ADHD通級以外】1学期：週2回→2・3学期：週1回→終了

【掲載例 中学生：新規通級生徒】

月	時間	0	25分	50分	通級指導教室の取組	学校行事
4月			活動1		オリエンテーション	
5月				活動5	職場体験学習で予想される困難に対応する指導を、活動内容に含めて仕組む（在籍学級との連携強化）以下同じ	職場体験学習（下旬）
6月			活動2			
7月				活動3	少人数指導	
8月					保護者面談、指導内容の修正検討	
9月						
10月						修学旅行（中旬）
11月						
12月					少人数指導	
1月				活動4	保護者面談（次年度の希望確認）	
2月					校内支援委員会	学習発表会（上旬）
3月					本年度の評価（成果と課題）、次年度の個別の指導計画・年間指導計画等作成、引継ぎ	

第3章実践例（案）

※活動1…リフレッシュ・リラックスタイム

活動2…苦手でがんばる必要がある活動

活動3…強みを生かして取り組む活動

活動4…1学期の様子・保護者の面談等を受け、2学期から開始した難易度を上げた活動

活動5…振り返り

※随時、児童生徒の在籍学級での状況を把握する。（授業参観、休み時間等の様子の観察、在籍学級の担任との情報共有）

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

ポイント1→ア

ポイント2→イ

ポイント3→ウ

ポイント4→エ

4. 挿絵、写真やレイアウトのイメージ

1. イラスト

- 先生の困り顔（項目横）

- 学校行事、個別指導、少人数指導（年間指導計画表例上）

2. 写真又は図

- 自立活動の個別の指導計画例

第3章実践例（案）

実践例6 1 単位時間の授業計画はどんなふうに立てればいいんだろう？

1. 対応する際のポイント

情報収集 → アセスメント → 個別の指導計画 と進む中で、子供一人ひとりに合った指導目標がいくつか設定されます。その指導目標の中から、本時はどこに焦点を当てて指導するかを選択し、1 単位時間の授業計画を立てます。

また、個別指導で学んだことを小集団指導で実践するなど、個別と小集団の指導を組み合わせることで効果的な指導ができます。

<個別指導>

2. 実践例の概要

小2 言語発達に遅れがみられる（高度難聴 人工内耳を使用）

- ・自分から活発に話す。聞き手の反応を気にせず、やや一方的に話すことがある。
- ・絵や擬音語による説明が多く、言いたいことが伝わりにくい。
- ・思い通りにしないと、活動から離れてしまうことがある。
- ・絵や動作など、視覚的な情報を理解することが得意。
- ・子供の願いは、「国語の勉強をがんばりたい。友達と楽しく遊びたい。」

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

個別の指導計画

年間指導目標

- ・傾聴態度や話を確実に伝えようとする姿勢を育てる。
- ・生活に必要な語彙を拡げ、経験したことをことばで理解、表現する力を伸ばす。
- ・複数の人とのやりとりを楽しむ経験を積む。

1 学期の指導目標

- ・話が伝わったことを確かめようとする意識をもつことができる。
- ・経験したことをことばで表現することができる。
- ・生活に必要な身近な語彙を拡げる。
- ・自分の考えや気持ちをことばで伝えることができる。
- ・友達と一緒に活動を楽しむ経験を積む。

1 学期の学習内容

- ・話の要点を聞いたり質問に答えたりしながら話す。
- ・学校行事や家庭での出来事を題材に、話したり絵や文にかいたり生活文を読み取ったりする。
- ・3 ヒントクイズ、絵と文字のマッチング等をする
- ・気持ちを表すことばを知る。指導者の支援を得て、気持ちに合うことばを選んだり、話したりする。
- ・小集団学習で、友達と一緒にゲームなどをする。

本時は、ここに焦点を当てて、授業計画を立てます。

ポイント

- ① 学習のねらいを明確にし、スモールステップで「分かる、できた」と思える学習を。
 - ・少し頑張ればできる、ヒントがあれば分かるような課題を設定しましょう。
- ② 子供の興味・関心、長所を活かした主体的な学習を。
 - ・相談、選択、振り返りなどの活動を取り入れ、自ら学ぶ、自信をつける工夫をしましょう。
- ③ 話す、聞く、読む、書く、体を動かす、などの活動をバランスよく。

本時のねらい

- ① 遠足の経験を振り返り、経験したことをことばで表すことができる。 ← 経験をことばで

第3章実践例（案）

② 夏に関連することばを集め、絵と言葉をマッチングすることができる。←語彙を拡げる

分	活動内容	指導の手だて・配慮事項	用意する物
5	<p>1 今日の学習内容の確認・順番決め</p> <p>はじめのあいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習予定表に学習の順番を記入。 	<ul style="list-style-type: none"> 取り組みたい順番を決めさせる。 	学習予定表
<p>活動の順番を本人が決めることで、見通しをもって主体的に取り組みやすくします。</p>			
15	<p>2 直接経験したことをことばで表現</p> <ul style="list-style-type: none"> 遠足に行ったことを話す。 「遠足」の生活文を読み取る。（ことばの穴埋め、問題に解答） 	<ul style="list-style-type: none"> 写真や絵、しおりを見せる。 経験に即した生活文を提示。 ことば絵辞典などで調べる。 	写真、絵しおり 生活文ワークシート ことば辞典
<p>子供が分かりやすい直接経験を話題にします。</p>		<p>写真、しおりなどの視覚的なヒントを示し、経験の想起を助けます。</p>	
<p>直接経験→写真や絵→生活文と、徐々に抽象的な表現にしていくことで取り組みやすくし、「分かる、できた」と思えるようにします。</p>			
15	<p>3 夏に関連することばあそび</p> <ul style="list-style-type: none"> 夏に関わることばを確認し、絵と文字のカードで神経衰弱をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 文字カードの音読、絵とことばのマッチングで、何回もことばに触れさせる。 	季節の図鑑 絵カード 文字カード
<p>絵をヒントに、ことばの意味の理解を助けます。</p>		<p>ゲーム感覚で、楽しく主体的に取り組めるようにします。</p>	
5	<p>4 今日の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> 頑張ったことなどを自己評価。 <p>終わりのあいさつ</p>	<p>「分かった、できた」という思いをもたせます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習した物を見せ、頑張ったことやできたことを伝える。 	

<小集団指導>

ポイント

- ① 子供達の共通する課題の中から、どこに焦点を当てるか選択し、本時のねらいを設定。
 - ・どの子も取り組めるような内容を設定しましょう。
- ② 子供同士の関わりを大切に。友だちと一緒に活動する楽しさを味わわせる。
 - ・スモールステップで、安心して失敗したり挑戦したりできるようにしましょう。
- ③ 個々の子供の課題に合わせたねらいや支援の設定。
 - ・個別の学習内容が小集団指導で生かされるとよいでしょう。
- ④ チームティーチングで。
 - ・リーダーとサブリーダーの役割、子供の課題を共通理解して臨みましょう。

※小集団指導の「実践例の概要」「本時のねらい、略案」はリンク先に

第3章実践例（案）

※ 以下は、リンク先の資料。

<小集団指導>

2. 実践例の概要

<p>・小1～2年生 4名 言語発達に遅れがみられる。(中等度～高度の難聴がある。補聴器や人工内耳を使っている。)</p> <p>A：言語発達の遅れが目立つ。視覚的な情報の理解がよい。 →指導者の支援で友達の話やゲームのルールが理解できる。</p> <p>B：注意がそれやすい。 →友だちの話を最後まで聞くことができる。カードをよく見てゲームに参加できる。</p> <p>C：思い通りにならないと活動にしり込みしがち。 →クイズのヒントや約束メモを見て、気持ちを調整し、最後まで活動できる。</p> <p>D：初めての活動への不安が大きい。 →個別指導で事前に活動内容を知り、見通しをもって活動に参加できる。</p>

本時の学習

<p>① 子供達の共通する課題の中から、どこに焦点を当てるか選択し、本時のねらいを設定。 ・どの子も取り組めるような内容を設定しましょう。</p> <p>② 子供同士の関りを大切に。友だちと一緒に活動する楽しさを味わわせる。 ・スモールステップで、安心して失敗したり挑戦したりできるようにしましょう。</p> <p>③ 個々の子供の課題に合わせたねらいや支援の設定。 ・個別の学習内容が小集団指導で生かされるとよいでしょう。</p> <p>④ チームティーチングで。 ・リーダーとサブリーダーの役割、子供の課題を共通理解して臨みましょう。</p>

本時のねらい

- ① 経験したことを「いつ、どこで、だれと、何をした」がわかるように話すことができる。
- ② いくつかのヒントから、一つのことばを連想することができる。
- ③ 気持ちや注意が逸れそうになっても、約束を確認したり教師の声かけを聞いたりして、最後までゲームをすることができる。

分	児童の活動	指導の手だて	個別の配慮事項
5	<p>はじめのあいさつ</p> <p>1 今日の学習内容の確認</p> <p>今日の活動内容を知り、見通しをもって取り組みやすくします。</p>	<p>個々の課題に合わせた支援をします。</p>	<p>AB；予定表（視覚情報）に注目させる。</p> <p>CD；個別指導時に活動内容を予告し見通しをもたせる</p>
15	<p>2 連休中の出来事を発表</p> <p>・スピーチメモを書く。 ・スピーチメモに沿って発表する。 ・質疑応答する。</p> <p>お互いの経験を話したり聞いたりすることで、友達に関心を持ったり、友達の気持ちを知ったりするようにします。</p>	<p>・教師が発表のモデルを示す ・スピーチメモに話す項目(5W)を示す。 ・教師が質問し、例を示す。</p>	<p>A～D；個別指導時に、連休中の話を聞いておく。 迷っている児童には、事前に聞き取った情報をもとにヒントを与える。</p> <p>個別で学習したことをいかして取り組みやすくします。</p>

第3章実践例（案）

20	<p>3 グループの友達と連想ゲームをする。（ことばのネットワークの拡充）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連想ゲーム「わたしはだあれ？」をする。 ・友達のヒントを聞き、自分のカードに書かれている物を当てる。 ・友達に、ヒントを出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒントの出し方を示す。（例；第1ヒントは「仲間のことば」、第2ヒント以降は関連語） ・教師がヒントを例示する。 	<p>A；仲間のことばを例示し選択させる。 A～D；ヒントの手掛かり（色、味、鳴き声、使い方など）を示し、ヒントの選択肢を示す。</p>
<p>友達とのやりとりや一緒に活動する楽しさを感じられるようにします。</p> <p>友達の反応を見ながらヒントを出す、自分から質問するなど、望ましいやりとりがあったら、その場でほめます。</p>			
15	<p>4 グループの友達と勝敗のあるゲームをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルール説明をきく。 ・約束を確認する。 ・ルールを守ってゲームを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が遊び方を例示する。 ・約束メモを置いておく。 	<p>A；T2と一緒にカードを確認する。 B；友達が出すカードに注目するよう声かけをする。 C；約束メモを見せる。約束が守れた時はほめる。 D；事前にゲームを体験させておく。</p>
<p>友達と一緒に活動する楽しさを感じられるようにします。</p> <p>子供が約束を確認できるようにしておきましょう。</p>			
5	<p>5 今日の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習の感想を発表する。 <p>終わりのあいさつ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の評価とその理由を伝える。 	<p>分かりやすく話せた、友達に譲っていた、我慢ができたなど、友達とのかかわり方をほめ、望ましい行動を意識させるようにします。</p>

5. 参考資料

- ・小集団学習の略案
- ・略案に示した教材
- ・障害種別の略案
- ・同じ症状でも、原因が違う場合の指導略案の比較 など？

第3章実践例（案）

実践例7 決まった教科書がないというけど、何を使って教えればいいんだろう？

1. 対応する際のポイント

一人一人の状況や願いに耳を傾け、寄り添うことから始めます。子供の抱えている困難やその原因と考えられる障害の特性、「こうしたい」という願いを理解します。そして、その子供に合った指導目標を立て、学びやすいように教材や教具を工夫しながら指導します。

- ・子供の興味・関心のあること、得意なことと関連付けた教材を準備しよう
- ・あらゆる資源を活用しよう

2. 実践例の概要

授業の準備について、このようなことで悩んでいませんか？

- 自立活動の指導には、教科書・指導書がないけど、何を根拠に授業を計画すればいいのかな？
- アセスメントを参考にしながら、どのように個別の指導計画に生かせばいいのかな？
- 前任の先生から引き継いだ教材はあるけど、どうやって使うのかな？

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

【自立活動の指導には、教科書・指導書がないけど、何を根拠に授業を計画すればいいのかな？】

第2章にも示されているように、個々の実態把握に基づき、指導目標や指導内容を設定し個別の指導計画を作成して指導します。「障害の状態等によって、様々なつまずきや困難が個々によって違うため、個別の指導計画を作成し、指導する必要があります。

【アセスメントを参考にしながら、どのように個別の指導計画に生かせばいいのかな？】

保護者や子供からの聞き取り、発達検査など基本の情報を得た上で、在籍学級における授業観察を通して、子供が実際に困っていることや周囲の環境などの課題を教師が「自分の目で見て」把握することが具体的な支援・指導の手立てを考える上でとても重要です。

（事例1）

在籍学級で授業観察をしたときに、ノートをとることに苦労している様子がありました。黒板を見て、写す言葉を記憶し、視線を手元のノートに移動させて書き写す一連の動作の、どの部分につまずきがあるかをさらに分析し、眼球運動に制限があることが分かりました。

そこで、通級では、板書視写の練習を単純に繰り返すのではなく、眼球運動を改善するための教材を取り入れることを計画してみました。

第3章実践例（案）

（事例2）

通級指導で読み書きの練習に取り組むことになり、教材をどのように工夫すればよいか検討しました。子供への聞き取りで電車が大好きであることが分かり、新幹線の写真カードとひらがな文字カード「とき」「のぞみ」「つばさ」…を使ってマッチングさせたり、読ませたりしてみました。

今まで、文字には抵抗があり、読み書きの学習に取り組むことが難しかった子供も、好きな電車を題材にしたことで意欲が向上し、少しずつ読める文字が増えてきました。

POINT 1：苦手なことを反復させるのではなく、子供が好きな物やキャラクター等を活用し、ゲーム感覚で楽しく取り組めるようにするなどの工夫が大切です。

POINT 2：「ちょっとがんばってチャレンジしてみたらできた！」というように、難しすぎず、簡単すぎないよう達成感をもてるような個に応じた課題設定をしていくと、子供の意欲が向上します。

【前任の先生から引き継いだ教材はあるけど、どうやって使うのかな？】

第2章（1）-②、（4）、にも述べられているように、子供の情報を引き継ぐことが重要ですが、目の前にある教材・教具をどのように活用していたか、細かいところまでは、分からないこともあるかもしれません。しかし、引き継がれた教材・教具があることは、系統的・継続的な指導につながり、子供にも安心感を与えることができます。

まずは、前年度から引き続き同じ教材を使用してみて、その子供がどこまで到達できているかを確認し、次の課題を見極めることが大切です。

また、今ある資源を十分に活用するためには、引継ぎの他にWEB検索を効果的に使用して情報を得たり、各障害種に関連する研究団体の研究実践を参考にしたりする方法もあります。

5. 参考資料

課題別、または障害種別の教材例を情緒・難聴言語・弱視等でのせられるとよい。
特別支援教育教材ポータルサイト（特総研）

第3章実践例（案）

実践例8 準備した課題になかなか取り組んでくれない…。児童生徒と接する際には、何に気を付ければよいんだろう？

1. 対応する際のポイント

取り組めない原因を二つに分けて対応方法を考えましょう！

*様々な原因がありますが、ここでは二つの原因について考えていきましょう。

①子供のコンディションが原因かな？

(1) 子供の思いを引き出し尊重する。

- ・気持ちを表出する時間をつくる
- ・傾聴を心がける
- ・授業のはじめにフリートーク
- ・水分を取るなど気持ちの切り替え

②教師の関わり方や課題そのものが原因かな？

- (1) 違った角度から子供を見てみましょう。
- (2) 学習内容を子供と相談して折り合いを付けましょう。
- (3) いくつか事前に活動を用意して活動を選べるようにしましょう。

*どちらの場合も、好きなことを授業に取り入れて意欲が持続するように工夫しましょう。

2. 実践例の概要

Aくん 小3

- ・知的発達に遅れはなく、ADHDの診断がある。
- ・椅子に座って学習をすることが苦手で、立ち歩くことが多く学習課題に取り組みにくい。
- ・興奮すると大声を出したり手が出たりするが、納得すると落ち着いて取り組める面もある。

通級指導の目標：

- ・教師とのやりとりを通して、自分の気持ちを知ることができる
- ・好きな学習課題を教師と一緒に取り組むことを通して自分に自信を持つことができる。

通級指導における学習内容：

- ・自分の気持ちや最近のコンディションを教師に伝える（フリートーク）。
- ・教師と一緒にやりとりを通して、学習課題を確認し学習に取り組む。

第3章実践例（案）

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

子供のコンディションが原因かな？

①Aくんの気持ちを表出する時間を作りましょう。

- 授業開始時や開始前にフリートークで自分の気持ちを表出する時間を作ります。
 - 自分の気持ちの状態をホワイトボードに書くなど、可視化することで言語化を助けます。
 - やりとりができるようになると自分で考え、行動を調整することができるようになります。
- *まずは気持ちを表出し、教師とやりとりができるように関わりましょう。

②タイムタイマーを取り入れましょう。

- 行動の調整ができないときに、時間の枠組みを視覚化できるタイマーを使うと行動の調整が付きやすくなります。時間配分の設定もやりとりの始まりです。子供と一緒にいきましょう。
- *詳細はこちら：〇〇〇

教師の関わり方や課題そのものが原因かな？

③違った角度からAくんを見てみましょう。

- 課題に取り組めない→でも自分で決めて通級の教室に来たんだよね！「自分のことを認めてくれる」と子供が思う関わりも大切です。
 - 課題を「やるーやらない」だけの選択肢だけでなく、活動をいくつか用意して「これをやるーそれともこれ」と活動を選べるようにしましょう。
- *自立活動 人間関係の形成

④Aくんの意欲が持続しない時：好きなことを授業に取り入れてみましょう。

- *算数は嫌い！でも体を動かすことは好き！
 - 体を使った算数に挑戦。ジャンプした分だけたいこをたたいて、黒板に数字を書いてみましょう。
 - 数直線の上をジャンプすれば、足し算や引き算にも応用できます。
- *通級の目標と照らし合わせて、授業の振り返りをしましょう。

第3章実践例（案）

実践例9 補習をやるところではないけれど、教科の内容を活用できるのかな？

1. 対応する際のポイント

- (1) 通級による指導を効果的に進めるために、通級のねらいや指導の目標に応じて教科の内容を取り扱うことができます。
- (2) たて軸と横軸の二つの視点をもって指導を組み立てていくことが効果的です。たて軸は、将来の自立と社会参加のために、長期的な目標をもち、スモールステップで力を付けていく視点です。横軸は、今の状況を改善し、学校生活を自信と意欲をもって送れるようにする視点です。教科の内容を活用することで、「できた」「わかった」を実感し、学校生活を充実させていくことができます。

2. 実践例の概要

<児童>

- 小学校4年生、ASD傾向、ADHD傾向
- 言語コミュニケーションが苦手。社会性が育ちにくい、集団参加の基礎的な力がついてきた。
- 学習全般に遅れはないが、不注意傾向が強い。手先が不器用。
- かけ算の筆算につまづき、正しく計算しようとするという気持ちがもちにくくなっている。

<年間の指導目標>

- (1) 自己理解を深め、自分に合った学び方を選びながら、学習に意欲的に取り組めるようにする。
- (2) 目標をもち、できることを増やしながらか、学校生活への自信と意欲を育てる。

<本児への指導における主な自立活動の項目>

- 4 環境の把握 (2) 感覚や認知の特性について理解と対応に関すること
- 3 心理的な安定 (3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること
- 6 コミュニケーション (1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること

これらの指導を効果的に行うために、「わり算の筆算」の学習を取り上げ、活用します。

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

第3章実践例（案）

自分に合った学び方を見つけよう～わり算の筆算にチャレンジ！～

個別学習で、他の内容と平行しながら帯で取り組む

① わり算の学習が始まる前に、作戦会議をしよう

- かけ算の筆算を学習した時のことを思い出し、できたこと、できなかったことを整理する。

できたこと	できなかったこと
<ul style="list-style-type: none"> • かけ算、足し算の計算が速くて正確 • 筆算の仕組み（意味は分かる） 	<ul style="list-style-type: none"> • 計算する手順を忘れる • 書く場所がわからなくなる（迷子になる）

- 自分の得意なことと苦手なことを考える。
- 自分に合いそうな手立てを選ぶ。
○手順カードを手元に置いて、確かめながら計算する。
○手順が分かりやすい、わり算シートを活用する。
- 授業を担当する先生に、どのように伝えるか相談する。

- 1 たてて
- 2 かけて
- 3 ひいて
- 4 おろす
- 5 たてて
- 6 かけて
- 7 ひいて

②授業でやってみて、作戦を見直そう その1

- うまくいったことは何かな
→手順カードがあれば一人でできた。
- うまくいっていないことはないかな。
→わり算シートはなくても大丈夫。みんなと同じノートでよい。

②授業でやってみて、作戦を見直そう その2・その3

- その後の学習はどうか
→状況を聞きながらいくつかの手立てを提示し、自分に合ったものを選ぶ。
→宿題が多すぎて、やりきれない時が増えてきた。
- 宿題のことを在籍学級の担任の先生に、どのように伝えるか相談する。

③自分研究ブックにまとめる

- 自分に合ったやり方を選ぶとできることが増える。
- やり方が面倒な学習は、手順表があるとやりやすい。
- 難しい課題は、ちょびちょび作戦だと宿題がはかどり、最後には皆と同じ量ができる。

子供が自己の理解を進めていくことは通級の指導の大きな柱ですが、指導が難しいと感じています。子供の「これができるようになりたい」からスタートして、指導を組み立てていくと、自分の得意不得意について考えたり、なぜそうなるのかを考えたりすることが比較的スムーズにできます。また、授業を担当する算数の教員や担任、保護者と連携しながら指導を進めることで、関係者が本児の理解をさらに深めることにも繋がります。

4. 挿絵、写真やレイアウトのイメージ（あれば）

<わり算筆算手順カード>

<わり算シート>

「わかった」と意欲的に課題に取り組む子供のイラスト

第3章実践例（案）

実践例10 通級による指導を在籍学級での各教科等の指導にどんなふうに生かしていけるかな？

1. 対応する際のポイント

通級で行う自立活動の指導は、各教科等の指導と手立てを分けて考えることが必要ですが、各教科等の学習目標を達成するために必要な力をつけて、自信をもたせることが大切です！

2. 実践例の概要

子供が在籍学級で困っていることや、もっとうまくできるようになりたいことを子供の特性や発達段階に合わせたスモールステップを組んで指導することで自信をもって取り組めるようになっていきます。

このようなことでこまっていますか？

- ① 目と手の協応動作（手先の器用さ）に苦手さのある子供にとって算数や図工で使う道具の操作がうまくいかないとイライラしてしまいますね。
その教科がきらいになってしまうかも…
- ② 体の動かし方がぎこちないため、少し練習しただけでは、なかなか上達できず、体育の時間は、参加しづらくなっている子供には…
- ③ 在籍学級という大きな集団の中で、授業を受けるための基礎となる力をつけて、ストレスや負担を軽減したい…（集団参加）

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

- ① 第3学年算数科で「円と球」の単元に入る前に、操作が難しいコンパスの使い方を練習し、その単元が始まったときには、不安なく授業に参加できるよう準備しておく。
<指導のステップの例>
 - (1)コンパスのつまみを回すときの腕、手首、親指、人差し指、中指の役割と動きを確認する
 - (2)進む方向に少し傾けることを知る
 - (3)コルク板を下敷きにして針を固定して練習する（写真を挿入）
 - *回しやすい半径5 cm位から始める
 - *半径が3 cm以下になると回しにくくなるので、繰り返し練習する
 - (4)円の描き方のコツがつかめたら、在籍学級で実際に円を描く場面を想定し、ノートやプリントなどに円を描く練習をする。

第3章実践例（案）

- ② 体の動かし方がぎこちない子供に感覚統合の視点から基礎の動きを指導し、体育の様々な運動につなげるよう段階的に支援する。
例：跳び箱運動が苦手な子供に、「走る」「ジャンプ」「両腕の保持力」「視線」「リズム」などを細かく分解してそれぞれの動きを獲得させ、体の動かし方を身に付けさせる。その上で、一連の動作に取り組む。その際、タブレット端末のカメラ機能で子供の動きを撮影し、修正点などを視覚的にイメージできるようにする。
- ③-1 読み書きが苦手、視覚認知に課題がある、視力が低い子供に、負担を軽減するための補助的な教材を使用することで、授業に意欲的に取り組めるようにする。
例：タブレット端末に教科書デジタルデータを入れて、読み上げ機能を使用したり、文字サイズ、文字色、背景色、行間などを子供の特性に合わせて設定したりする
※UDブラウザ等のアプリを使用した教科書デジタルデータの様子が分かる写真
- ③-2 通級でSSTの学習を通して友達とのかかわり方を学び、在籍学級でのグループ活動の際に生かす。
例：通級で友達と協力して課題をクリアしていくゲームに取り組み、達成感を味わうことで、友達と協力することの大切さを学ぶ。また、在籍学級の各教科等における学習時に、グループ形式で学習する場面を想定し、自分がどのように参加すればよいか考える経験を積み重ねる。

在籍学級で「自分はこのような工夫があれば、みんなと一緒に勉強できる！」という参加の仕方が具体的にになると、子供が主体的に学ぶ意欲が育っていきます。通級による指導は、通常の学級の教育課程を見通した上で指導計画を立てることも重要です。

5. 参考資料

「弱視通級指導学級の指導計画と通常の学級指導計画との関連について」
—視覚・運動の協応（道具の操作・扱い方）を中心に—
※各学年で使用する主な道具類一覧あり

第3章実践例（案）

実践例11 そろそろ運動会の時期だ。通級でやっている内容を学校行事でうまく活かさないかな？

1. 対応する際のポイント

在籍する学級への適応を高めていくためには、在籍学級の担任や保護者との連携が欠かせません。学校行事は、取り組む期間が長いこと、学校全体に関わること、特性が表れやすいことなどから、うまくいくと、その子自身が学級への適応を高めると共に、連携のよさを実感するチャンスにもなります。通級の「相談機能」を活かし、次の3つをポイントに指導していきましょう。

- (1) 子供の思いや願いを活かす
- (2) 保護者との合意形成
- (3) チームで支援

2. 実践例の概要

<想定する児童・生徒> 小学校1年生

- ・行動や気持ちの切り替えが難しく対人意識も育ちにくいので、集団での活動にスムーズに参加できていない。
- ・言語コミュニケーションが苦手で、困ったことがあっても周囲に伝えられない。
- ・微細運動や協同運動等が苦手で、できないと思うと課題に取り組めない。

<通級による指導の目標と行事との関連>

- ① 人と関わることの楽しさを味わいながら、集団参加の基礎的な力を身に付ける。
→運動会の練習や当日の見通しをもたせ、安心して行事に参加できるようにする。
→小集団の指導で積み重ねた「他者に応じること」「一緒に楽しむこと」を在籍学級の担任やクラスメイトの支援の下、運動会の練習に広げていく。
- ② 段階的にできることを増やし、学校生活への自信と意欲を育てる。
→身体の動きに関する指導を運動会の練習と関連させて行うことで、課題に意欲をもって取り組めるようにする。

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

(1) 思いや願いを活かす

- ・その行事のエピソードを聞いたり集めたりしながら、子供の思いや願いを探るところからスタートします。
- ・行事は誰もが成功させたいと思うので、知らず知らずの間に、在籍学級の担任も保護者も、周囲の児童も、本児に対して普段より要求が高くなります。支援会議で事前に状況を把握し、支援の方針を明確にしておくことが大切です。

(2) 保護者との合意形成

- ・大きな行事では、「よかれ」と思ったことが、目立ちすぎてしまい、保護者にとって心理的な負担になることがあります。後から、「もっとこうしてほしかった」と伝えられることもあります。その都度、合意形成を図りながら取り組むことで、信頼関係がつかれます。

(3) チームで支援

- ・支援会議で役割を分担し、チームで支援していきます。状況をこまめにやりとりしながら、うまくいかないことはその都度相談します。これらの経験は、これから先のスムーズな連携につながります。
- ・通級担当者は、在籍学級の担任と子供、子供同士、在籍学級の担任と保護者をつなぐ、「黒子」のような存在を目指して支援や指導をします。

第3章実践例（案）

＜子供に対する通級での指導＞	
<p>○コミュニケーションタイム（グループ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スピーチで自分の学年の種目の紹介をする、季節の言葉で応援の掛け声を取り上げるなど、運動会のことを話題にしなが、一緒に楽しむ雰囲気をつくる。 ・運動会後のスピーチで感想を発表し合い、様々な感じ方があることを知る。 <p>○運動タイム（グループ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常の指導内容に、一部、全校で取り組む競技や体操を取り入れる。 ・ミニゲームの応援に運動会の応援の掛け声を取り入れ、楽しみながら声を出す。 <p>○個別学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会への思いや困っていることを聞き取り、整理する。援助の求め方を相談する。 ・運動の課題にダンスを取り入れ、スモールステップで取り組む。 ・プログラムを活用して運動会当日のスケジュールを作成し、安心して参加できるようにする。 ・運動会の振り返りをし、努力したことを価値づける。楽しかったことだけでなく、苦手なことやうまくいかなかったことがあったらそれも表現させ、気持ちを受け止めながら、次があることを伝える。 	
＜在籍学級の担任に対して＞	＜保護者に対して＞
<p>○指導方針や手立ての明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会に対する個別の目標を一緒に考える ・練習期間に起こりそうなことを想定し、手立てを一緒に考える <p>○環境調整（学級での指導の中で）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本児だけでなく、周囲の児童に支援することで、練習に参加しやすくする ・学年練習に参加し、支援をしながら本児の状況や手立てを周囲に伝える 	<p>○思いを受け止め、具体的なサポートを依頼</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームの一員であることを意識してもらえようにする ・家庭で取り組むことを明確にする <p>○運動会当日の役割分担</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会当日に家庭で支援してもらいたいことは何か、在籍学級の担任と三者で打ち合わせる (水分補給など体調管理も含めて)
<p>保護者、担任、通級担当者での支援会議</p> <p>母親：「就学前は毎年運動会の練習を嫌がり、促してもなかなかやろうとしないので困りました。本番だけは、何とか参加できました。かけっこはやりましたが、ダンスはとても嫌がりました。当日の応援は楽しんでいました。どこまでできるか心配ですが、1回目なので、あまり嫌にならないようにしたいと思っています。」</p> <p>通級担当：「ダンスは、見本の映像を見ながら、通級や家庭でも先に練習してみましよう。運動会の練習や当日のスケジュールを相談しながら作成し、活用してみます。」</p> <p>担任：「練習にうまく入れないときには、無理強いはしませんが、声をかけ続けます。仲良しのAさんたちにも誘ってもらおうと思います。」</p>	
<p>通級による指導と支援</p>	

4. 挿絵、写真やレイアウトのイメージ（あれば）

個別にダンスの練習をしているイラスト
 友達が、立ち位置を教えてくれているイラスト
 支援会議をしているイラスト など

第3章実践例（案）

実践12 担当している児童生徒が、最近欠席や遅刻が多くなってきている。どうしたらいいんだろう？

1. 対応する際のポイント

※在籍学級の担任も、欠席や遅刻が増えてきている状態を把握していることを前提としている。

1. 在籍学級の担任と情報（在籍学級の担任等の対応状況、子供・家庭の状況、要因と思われる事項等）を共有しよう
2. 当該児童生徒にかかわる教職員及び保護者で役割分担を行い、通級担当としての支援内容や方法を明確にしよう
3. 自立活動の個別の指導計画を見直し、必要に応じて目標や指導内容等を修正しよう
4. 通級指導時に、当該児童生徒や保護者の思いや願いに耳を傾け、関係教職員で共有しよう

2. 実践例の概要

ア. 在籍学級の担任と、在籍学級での学習や生活の様子（欠席・遅刻への対応を含む）、欠席等の要因と思われること、保護者や子供の思いなどを確認するとともに、最近の通級時の様子などを共有する

イ. 関係者チーム（保護者・教員・SC・特別支援教育コーディネーター、特別支援教育支援員等）で、今後の支援について協議する。

- ・情報共有 ・情報整理及び課題となることの抽出 ・支援方針及び目標決定
- ・支援方針に基づいた役割分担

※「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味をもつことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意することといった既出の通知の意図等にも留意する。

ウ. 通級指導担当として、指導目標や内容に修正する必要があるかを検討。

※これまでの指導に加え、自立活動の区分「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」等から指導内容に追加・修正がないかどうかを確認することが重要

例（1）心のエネルギー（元気さの度合い）を蓄えられるように、得意なことを生かした活動の時間を増やす

（2）指導内容に、ストレスコーピングのパターンを変更するものやアンガーマネジメントトレーニング、アサーショントレーニング等を取り入れる

エ. 通級時の会話等で、子供の心のエネルギーの状態や保護者の思い等を把握し、通級指導の内容や方法の修正に生かすとともに、在籍学級の担任をはじめ、関係教職員で共有し、それぞれの役割における取組に生かす。

※これは、例えばSCによるカウンセリング時の情報を通級指導に生かすなど、相互に行うことが重要。

※子供の状態が回復し、欠席が少なくなったという成果を最後に紹介する

第3章実践例（案）

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

1. 在籍学級の担任と情報を共有しよう → ア
2. 当該児童生徒にかかわる教職員及び保護者で役割分担を行い、通級担当としての支援内容や方法を明確にしよう → イ
3. 自立活動の個別の指導計画を見直し、必要に応じて目標や指導内容等を修正しよう → ウ
4. 通級指導時に、当該児童生徒や保護者の思いや願いに耳を傾け、関係教職員で共有しよう → エ

4. 挿絵、写真やレイアウトのイメージ

【イラスト】

- 児童生徒、保護者の疲れた表情、教員の困り顔
- ケース会議
- 面談
- 個別指導
- 教員の立ち話（情報共有）
- 児童生徒の笑顔登校（回復後）

5. 参考資料

- ↓通級指導にかかわらず、教員として知っておくべき情報あり
国立教育施策研究所、同生徒指導・進路指導研究センターへのリンク。
- 生徒指導提要（H22）
 - 生徒指導リーフ14「不登校の予防」※15・18もあれば。

第3章実践例（案）

実践例13 担当している児童生徒についてケース会議を開催することになった。何を準備すればいいんだろう？

1. 対応する際のポイント

- 子供の願い、保護者の願い、在籍学級の担任や学校の願い、それぞれの教育的ニーズを把握しておくことが大切です。
- 診断名や心理検査等の結果から障害の特性により想定される学習や生活上の困難さを整理します。苦手な面だけでなく、得意な面も把握しておきます。
- 在籍学級や通級による指導でうまく取り組んでいること、難しいことを整理します。在籍学級の担任や友達の配慮や支援により取り組んでいることも把握しておきます。
- 子供の実態だけでなく、学級集団の実態、在籍学級の担任等や他の子供との関係、子供同士の関係等、個人の特性と環境の状況の両面から情報を整理しておきます。

2. 実践例の概要

小学校4年生男児。自分の役割が決められていて、活動内容がわかっている場面では落ち着いて取り組むことができますが、自分の予想に反したことが起きると不安定になります。大声をあげたり、暴力的な行動に出たりすることもあります。こだわりや思い込みが強く、予定通りにことが進まないとても不安がり、そのことが気になり課題に集中ができなくなることもあります。自分の興味や関心のあることに関する知識は豊富であり、学習課題にも意欲的に取り組みますが、興味関心により取り組みの差が大きく、苦手だと思ふ課題には前向きに取り組もうとしません。大人との一対一の関係は比較的良好に保てます。限られた数人の友達とは一緒に遊びますが、自己主張や要求が多く一方的な会話になりがちで、自分の思いを通そうとするため、トラブルに発展することも多く見られます。

家庭では、子供の障害の特性を認識していますが、友達や弟とのトラブルが頻回であることを危惧し、できるだけ不安定にならないように子供の思いを優先させてしまうことが多いようです。保護者は、自分の思いを一方的に主張するのではなく、相手の話も聞けるようになること、まわりの状況に合わせた対応がとれるようになることを望んでいます。

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

- 子供の願い、保護者の願い、在籍学級の担任や学校の願い、それぞれの教育的ニーズを把握しておくことが大切です。

通級による指導では、保護者や在籍学級の担任等から出された教育的ニーズにより、指導目標や内容が決められてしまうことが多くなりがちですが、子供の教育的ニーズを把握しておくことがとても大切です。周囲の大人の願いと子供の願いが違っている場合は指導の効果は期待できません。年齢段階より自分の特性理解や課題認識に違いもありますが、子供の希望を含めた個別の指導計画の作成が望まれます。この事例では、子供も友達とうまく関わりたいという願いがありました。

- 診断名や心理検査等の結果から障害の特性により想定される学習や生活上の困難さを整理します。苦手な面だけでなく、得意な面も把握しておきます。

この事例は、医療機関でASDの診断を受けています。学習や生活上の困難さを整理する上でASDの障害特性は参考になります。また、発達検査の結果は認知特性の参考になり

第3章実践例（案）

ます。検査結果からは苦手な面だけでなく、得意な面を把握しておくことが指導の手がかりとなります。この事例では、聴覚的な注意の持続や短期記憶に弱さが見られますが、視覚的な情報処理や経験したことの言語的な知識や概念の理解はよくできることが心理所見から得られました。

- 在籍学級や通級による指導でうまく取り組んでいること、難しいことを整理します。在籍学級の担任や友達の配慮や支援により取り組んでいることも把握しておきます。

通級による指導を受けている子供は、在籍学級における学習や生活上に何らかの困難さを抱えている子供です。在籍学級における学習や生活上の実態を把握しておくことが大切です。実態把握には、保護者や在籍学級の担任等からの聞き取りだけでなく、実際に学級での様子を行動観察して情報を収集します。この事例では、活動内容が具体的に示されていること、視覚的な手がかりがあること、見通しがもてることが落ち着いて取り組めることの共通項でした。また、注意するのではなく、優しくやり方を教えてくれる友達の指示は聞けていることもわかりました。

- 子供の実態だけでなく、学級集団の実態、在籍学級の担任等や他の子供との関係、子供同士の関係等、個人の特性と環境の状況の両面から情報を整理しておきます。

適応の困難さは、個人の特性と環境の状況が合っていない場合に顕著になります。個人を環境に合わせる視点と環境を個人に合わせる視点の両面が大切です。この事例の在籍学級の担任の先生は、決められた学級のルールはきちんと守るという姿勢で学級経営をしています。子供たちもルールを守ることを意識しており、ルールから外れたことには互いに注意し合う雰囲気があります。一方で、子供の主体性も大事にしており、子供の学習意欲に応じて学習活動が変更されることもあるようです。これらのこともこの事例の適応状態に大きく影響している可能性が考えられます。

ケース会議は子供の具体的な支援の方策を考えるための会議です。①複数の目により子供の実態を多面的に捉える、②子供の課題について関係者が共通理解をした上で目標を設定する、③参加者全員で具体的な支援のアイデアを出し合うことがポイントです。そのためには、教員同士が日頃から気軽に子供のことを話題にし、支援の手だてについて相談し合える学校の雰囲気づくりが望まれます。参加者全員が自分の問題として臨み、事例を提供した教員が、多くの助言を得られてよかったと実感できる会議にすることが大切です。

第3章実践例（案）

実践例 14 担当している児童生徒が、放課後等デイサービスを利用している。そこでは、どんなことをして過ごしているんだろう。知りたいな。

放課後等デイサービスとは？

学校に就学している障害のある児童生徒が、授業の終了後又は休業日に通所支援施設に通い、障害の特性等を理解している専門家により、友達とのコミュニケーションなど、集団生活への適応のための支援や基本的な日常生活動作の支援など生活能力向上のための訓練などを提供するサービス。事業所によって提供する支援の内容はさまざまです。

1. 対応する際のポイント

①子供・保護者の思いを大切に

子供や保護者を置いてきぼりにしないように、どのような理由でどのように連携をしたいか、お伝えした上で開始しましょう。その後についても適宜報告・相談するようにしましょう。

②できることから実施する

連携に対する子供・保護者の願いや学校の状況などを踏まえ、初めから完璧な連携を目指すのではなく、できる連携から開始しましょう。

③状況に応じた方法を選択する

困りごとの緊急度や信頼関係などの状況に応じて連携方法を変更・改善しましょう。

連携方法の例

- 1) 電話で情報共有
- 2) 顔を合わせて情報共有
- 3) 放課後等デイへ見学、放課後等デイ職員の学校への見学
- 4) 学校の個別の教育支援計画、放課後等デイサービスにおける個別の計画の共有
- 5) 計画作成時と振り返り時にケース会議を実施する
- 6) 連絡ノートなどを活用して日々の様子をお互いに共有する
- 7) 同じ教材を使う

2. 実践例の概要

Aくん、小学校2年生

診断名：自閉症スペクトラム障害

困りごと：抽象的なルールや指示に基づき行動することが難しい、思い通りにいかない時に泣き叫ぶ・相手をひっかく

好きなこと・得意なこと：好きなアニメや番組のセリフを覚えること

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

①保護者（子供）に放課後等デイとの連携について相談（連携の目的・連携方法）（ポイント2）

保護者面談にて、特別支援教育コーディネーターより、特に泣き叫ぶ・相手をひっかく行動について、放課後等デイでの様子や支援について知りたいため、放課後等デイと情報共有をしたい旨をお伝えすると、保護者も連携を望んでいました。連携方法については、まずは保護者が放課後等デイに学校から連絡が来る旨を伝えた後に、学校から電話して挨拶をし、全員で顔を合わせて個別の計画の共有、特に困っている行動の指導・支援内容について顔を合わせて情報共有をしたい旨を伝えました。

※保護者面談のイラスト

第3章実践例（案）

②放課後等デイと情報共有・意見交換（ポイント1、3）

特別支援教育コーディネーターが、放課後等デイに電話し、上記の連携について、情報共有の日時を決めました。放課後等デイは放課後に運営をしているため、午前中空いている日に合わせ、保護者も同席してもらいました。以下の手順で1時間お話ししました。

- 1) 学校での取り組み内容説明
- 2) 放課後等デイでの取り組み内容説明、3) 困っている行動についての様子と支援内容について意見交換、4) 意見を踏まえた今後の取り組み
- 5) 今後の連携について

※電話しているイラスト

③ 放デイでの取組を踏まえた取り組み（ポイント3）

学校、放課後等デイ、家庭それぞれにおいて、特に話を聞いてほしい時に聞いてもらえない時、字の書き間違いや計算の間違いをした時に泣き叫ぶ行動や相手をひっかく行動が出るということがわかりました。そこで、持ち歩けるイライラ温度計と好きなアニメのセリフを言うなど子供の好きなことを活かしたイライラしたときの対処法リストを作成し、すべての場において活用することにしました。学校の個別の指導計画、放課後等デイの個別の計画それぞれに「温度計を用いて自分の現在のイライラの状態を指さすことができる」「イライラした時に対処法リストを活用し対処方法を自発的に試すことができる」を共通の目標として記載し、同じ教材を活用することにより、イライラ温度計と対処法リストを自発的に活用することができるようになりました。

※イライラ温度計と対処法リストのイラスト

④その後の連携（ポイント3）

①～③を通してお互いの信頼関係が築けたこともあり、次年度については学校の個別の教育支援計画作成時に保護者、通級の担当者、在籍学級の担任、放課後等デイサービス職員が一堂に介し、全員で対象児の長期目標の検討とそのための1年間の目標及びそれぞれの役割分担について話し合いがおこなわれました。

※笑顔で会議をしている様子のイラスト

5. 参考資料

- 放課後等デイに関する追加説明
- 児童発達支援事業についての説明
- 保育所等訪問支援事業についての説明
- 関係者で会議をする時のファシリテーションの仕方
- 放課後等連携支援事業の事業成果のHP

第3章実践例（案）

実践例15 そろそろ年度末。次年度の担当者に、何を、どうやって引き継ぎばいいんだろう？

1. 対応する際のポイント

- ①個別の教育支援計画、個別の指導計画における引き継ぎ内容を整理しましょう。
- ②通級担当者だけでなく通常学級担任と一緒に、新担当、新担任に引き継ぎましょう。
- ③引き継ぎを行うことや引き継ぐ内容について、保護者の了解を得ましょう。

ポイント1 個別の教育支援計画

何を！：本人や保護者の思いや願い、本児の様子、合理的配慮の内容、校内の支援、外部機関との連携の状況

- ・個別の教育支援計画をもとに、伝えることを整理しましょう。
 - ・保育園や幼稚園から引き継いだ内容がある場合は、それらも引き継ぎましょう。
 - ・今年度、どの機関から、どのような支援を受け、どうだったのか伝えられるようにしましょう。その際、関係機関（医療、放課後デイサービス等）にも引き継ぐことへの了解をとりましょう。
- ☆引き継ぎ項目をまとめた「引き継ぎシート」を作成しておく、ポイントに沿った引き継ぎが可能になります。

ポイント2 個別の指導計画

何を！：自立活動の指導目標、指導内容、指導方法、評価

- ・個別の指導計画をもとに、自立活動の指導目標や指導内容や方法、児童の変容について伝えましょう。
 - ・自立活動の指導で使用した教材教具やワークシートを提示したり、保管場所を確認したりしておくといいでしょ。
- ☆週指導計画を活用して指導の記録等を伝えることも効果的です。

<心の安定に関する自立活動例>

※自分の気持ちの振り返りや自分の気持ちの表現に活用する教材等をイラストや写真で掲載

第3章実践例（案）

（児童の状況）

- 小2、ADHDの診断
- 周囲の状況を考慮するのが苦手
- 特に算数の時間は、指名しなくても大きな声で答えを言ったり、「わからない」と叫んだりする
- 算数は嫌い
- 放課後デイサービスを利用している

ポイント3 在籍の学級での支援

何を！：人間関係、登下校の様子、授業中や休み時間、放課後や家庭

- 在籍学級での本児の様子について、通級担当者や在籍学級の担任から伝えましょう。特に、本児の苦手としていることや学級内の人間関係、子供の願い等について具体的に話しましょう。
- 在籍学級の担任として配慮してきたことを伝えてもらいましょう。授業中だけでなく、登下校や朝の会、休み時間、給食、掃除の時間、係活動等、授業ではない時間の様子や在籍学級の担任の目から離れた時の本児の様子について伝えましょう。
- 効果的な支援については、発展的な形で、次年度へも引き継いでもらえるようお願いしましょう。

<効果的な支援や掲示物の例>

「発言の仕方、聞き方の約束」の掲示

「予定（指示）」の掲示

※イラストや写真でイメージを掲載

児童は学校生活のほとんどの時間を在籍学級で過ごします。在籍学級との連携が大切です。在籍学級担任との情報共有を密にして、通級による指導の成果がどんな場面で表れているのか、また、課題は何かについて、普段からよく把握しておきましょう。

第3章実践例（案）

実践例 16 担当している児童はもうすぐ中学生になる。中学校に、何をどうやって引き継げばいいんだろう？

1. 対応する際のポイント

①これまでの「こうすればできます」を伝える

引き継ぎのコツは、児童が「くまいく方法」を伝える」ことに尽きるでしょう。実際には、その児童の「できないこと」「失敗してしまうこと」が引き継ぎ内容にされやすいですが、そうしたことは、中学校入学後、早い段階で中学校の先生方が分かってくることです。一方「こうするとできます」「こういう支援があれば自力でここまでやれます」という情報は、それまで長く関わってきた担当者だからこそ伝えられる引き継ぎ内容なのです。〈できないこと〉〈苦手なこと〉は、それを乗り越える〈手段〉や〈指導のヒント〉を合わせて引き継ぐことを心がけます。

②小学校と中学校との違いを意識する

小学校から引き継がれた内容が、中学校の先生方やコーディネーターからみて「小学校からできたのではないかな」「中学校は事情が違うのだけど」と感じる場合も少なくないようです。そこで、以下に、小学校と中学校で事情が違うため、その隙間を埋める必要がある事柄を列記します。引き継ぎの際に、その違いから予想される子供の不適応と対処の方法を伝えておくと、中学校側から「なるほど」「それならできそう」などの感想を引き出しやすくなります。

【教育形態】

○学級の担任はいつも教室にいるわけではない。

○教科担任制のため課題等の提出の仕方、ノートの取り方等が教科によって違う

【学習面】

○定期テストへの対応が求められる。

○授業態度、提出物、宿題がより厳しく評価され、成果が顕著に成績に反映される。

【学校行事・課外活動】

○学校行事(体育祭・合唱祭・文化祭・宿泊学習・職場体験)が活発化する

○委員会や係など生徒だけの集団の中で、自分で判断し行動する場面が増える。

○部活動(先輩-後輩などを中心とする複雑な関係理解 / 生徒だけの集団での振る舞い)

【生活面】

○思春期特有の人間関係(受け入れられるために正しくない行動をとりやすくなる/仲間作りに失敗したときの孤立感が大きくなる/異性との関係に変化が起きてくる)

③子供の希望を必ず確認する。

引き継ぎは、子供に関係する大人だけで行われるのではなく、子供が参加できるように工夫することが必要です。中学校進学に際しては、自身が受ける支援について「子供なりの希望」が持てる状況が理想的と言えます。そのためには、6年生後半の通級による指導に際して、中学校への進学について自分なりの意見をもてる機会を作ります。その中で、現実と理想の整理、自己理解と自己受容などできると、その後の中学校生活で受ける支援が子供にとって、より主体的なものになります。それらのプロセスは、その数年後に人生の岐路として直面する「進路選択」が要求される高校進学での土台ともなります。中学校進学時

第3章実践例（案）

に指導者と子供の間でなされたやりとりは、将来の保護者や関係者との真剣なやりとりなどが必要になる高校進学時につながっていきます。中学校進学時の「子供の希望の確認」「子供と進学後を想定した対応を考える」などの作業は将来に備えた意義ある指導と言えるでしょう。

2. 実践例の概要

6年生のA君は「友人関係を上手に保つこと」を目標に、4年生から通級による指導を受けてきました。通級の場では、「どんなときに自分の気持ちがコントロールしにくくなるのか」「落ち着くためにはどのような対応があるとよいのか」「友人関係で得意なこと不得意なことは何か」などについて学習を進め、中学校進学を前にして、それらについては自信をもつことができるようになってきました。

そこで、通級指導担当者は、A君の進学先である中学校の校内委員会に参加させてもらい、A君の「感情コントロール」について望まれる教育環境の作り方や配慮、不適應行動が起きたときの指導者側の対応方法について伝えました。中学校からは「教科によってはそうした配慮をすることが難しい」「生徒だけの活動場面ではどうしたらよいか」などの質問を受けました。そこで通級指導担当者は、課題となったそれらの事項について、卒業までの残された通級による指導の中で、子供が考える機会を作るとともに、中学校側には、入学後に子供と在籍学級の担任とで話し合う機会を作り、通級による指導で得られた内容を確認してほしいこと、さらに子供が安心できるように、中学校生活で予想される困難への対処方法について話し合うことを依頼しました。

3. 1. のポイントに対応する、2. の実践例における取組

通級指導担当者は、引き継ぎの場で、これまでの指導の目標と具体的な指導内容、そして通級による指導の成果を伝えることから始め、その成果を生かすことができるよう中学校生活での環境調整や支援方法の在り方を提案しています。これは「こうすればできます」を伝えるの原則を実践していると言えるでしょう。しかし、中学校側からは、その実践にあたり「小学校と中学校との事情の違い」が伝えられています。それに対して、通級指導担当者は、その違いを受け入れ、その対処について子供への（最後の）指導のテーマとして取り上げる約束と、その成果については、中学校で教育テーマとして確実に継続してほしい旨を伝え、「子供参加型の引き継ぎ」を実践しています。こうした丁寧なプロセスは、きっと子供の新しい環境での成長を支える一歩になるはずです。